

超高齢社会におけるシニア演劇の可能性に関する予備的考察

- イギリスにおける中高年の演劇活動実践を事例として -

五島朋子*

A Preliminary Study on the Perspectives of the “Senior Theatre” in Super-Aged Society A Case Study on the Theatre Activities by Older People in UK

GOTO Tomoko*

キーワード：シニア演劇, 高齢者と演劇, スコットランド, マンチェスター, クリエイティブ・エイジング

Key Words: “Senior Theatre”, Theatre and Older People, Scotland, Manchester, Creative Aging

I. はじめに

人口に占める高齢者の割合が増加し、高齢期の長期化によって、長い老年期を健康に、またどのように豊かな時間として過ごすことができるのかは、高齢者個人だけではなく、社会全体にとっても大きな関心となっている。

高齢者の前向きな暮らしを表現すべく、様々な言葉が登場してきた。20世紀後半には、プロダクティブ・エイジングやサクセスフル・エイジングという言葉が使われるようになる。これらは高齢者差別(エイジズム)による高齢者の社会的排除に対して、高齢者の積極的な社会参加の推進を含意していたが、活発な活動にのみ重きをおくのではなく、高齢者個人の生活や心の豊かさに着目し、アクティブ・エイジングという言葉が登場する。2002年に世界保健機関WHOが「アクティブ・エイジング—その政策的枠組み」(Active Ageing: A Policy Framework)で提唱した。アクティブという言葉は、社会的、文化的、精神的、経済的、そして市民的活動に参加できることを意味し、健康で労働市場に参加できるということだけを指すのではないとされた(鈴木 2019:5-6)。そこからさらに、高齢者が心地よく暮らせるコミュニティづくりは、すべての世代の暮らしやすい環境作り・まちづくりに繋がるものとして、「エイジフレンドリー・コミュニティ (エイジフレンドリー・シティ)」という考え方が登場し、WHOは2006年から「グローバル・エイジフレンドリー・シティ」プロジェクト

として認証プログラムを立ち上げている。

また、文化政策や芸術実践の分野では、「クリエイティブ・エイジング」という言葉も登場している。例えば太下(2016)は、高齢化とそれにとまなう社会的課題に対応する文化政策を「Creative Agingのための文化政策」と名付け、美術や音楽など様々な芸術分野における高齢者や老いに関わる国内外の取り組みを幅広く概観した上で政策提言を行なっている。本田(2020)は、中高年世代が日常生活を送るための基礎的な力を維持しながら、「多面的な活動を通じて積極的で充実した人生を送り、自己の存在意義を確認していく過程を「クリエイティブ・エイジング」(創造的加齢)の過程」と呼び、そのための文化政策の課題を検討している。アメリカでは、1970年代終わりからスーザン・パールスタイン Susan Perlsteinが、高齢者の芸術活動への積極的な参加を「クリエイティブ・エイジング」として推奨し、本稿で取り上げるイギリスにおける高齢者の芸術活動にも影響を与えた(Nesbitt 2019:23)。またイギリスでは、芸術活動への参加や関与が高齢者の心身の健康に良い影響を与えるだけでなく、高齢者の社会的孤立や孤独の解消にも資するという政策レポート(2017)¹が提出され芸術の専門家による高齢者を対象とした芸術活動の領域が「クリエイティブ・エイジング」として認知されている(Allen 2018:6)。

このように、個々人の長い老年期を豊かにするとともに、高齢化に関わる社会的課題にも寄与できる

*鳥取大学地域学部国際地域文化コース・附属芸術文化センター

という明確な位置付けがあって、イギリスでは高齢者のための様々な分野の芸術文化活動が展開しており、本稿では演劇分野に焦点を当てる。日本でも2000年代以降、アマチュアの中高年による演劇活動が隆盛し、「シニア演劇」と呼ばれるようになっていく(朝日2015, 梶谷2011)が、劇団やNPOなどによる自主的な活動が中心で、政策的な位置づけは弱く、専門的な評価を得る機会も限られている。本稿は、イギリスの事例を参照することで、日本におけるシニア演劇の運営や展開に示唆を得ようとするものである。

取り上げた4事例は活動の主体が、劇場、演劇団体、個人アーティスト、支援組織(アーツカウンシル)とそれぞれ異なる。具体的には、日本のブリティッシュカウンシルの事業²で紹介されたマンチェスターにあるロイヤル・エクスチェンジ劇場(Royal Exchange Theatre)、エジンバラ在住(当時)演劇制作者齋藤啓氏の紹介による演劇プロジェクト「フレイムス(The Flames)」, スコットランドのアーツカウンシルであるクリエイティブ・スコットランド(Creative Scotland)の紹介による上演プロジェクト「キュリオス・シューズ(Curious Shoes)」である。本稿の記述は、関連する資料調査のほか2018年11月に実施した現地訪問と関係者インタビュー、2019年5月の現地調査、2019年10月に実施した関連事業で得られた情報をもとにしている。

II. 劇場が運営するシニア劇団

1. エイジフレンドリー・マンチェスター(AFM)政策と文化施設

高齢者の演劇集団を持つ公共劇場の事例として、マンチェスターにあるロイヤル・エクスチェンジ劇場の活動を取り上げる。その大きな背景として、まずマンチェスター市の政策「高齢者に優しいマンチェスター(Age Friendly Manchester: AFM)」について述べておく。マンチェスター市の文化施設における高齢者のための活動は、この政策的な位置づけがあるからである。

マンチェスター市の人口は約53万人、65歳以上の高齢者人口の割合は9.4%³で、高齢化が進む日本と比べるとかなり低い。マンチェスター市は、人口規模の大きな大都市圏(グレーター・マンチェスターで人口約280万人)にあり、イングランド北西部における経済の中心である。若い世代の専門職を惹きつけ、また定員数の大きな大学があることなどから、人口

規模が同じ程度の他都市と異なり、若い世代の人口が増えている。そのため、高齢者の割合は比較的小さいものの、高齢者の孤立は相対的に深刻化し、経済的・社会的にも不平等な立場に追いやられ、行政上の大きな課題と認識されている⁴。そこで1990年代半ばから、これら課題に関する組織が立ち上げられ、高齢者のための政策が様々な検討され試みられてきた⁵。2003年は「高齢者に価値を(Valuing Older People: VOP)」という政策が立ち上げられ、翌年、高齢者自身が参加して政策を検討するVOP委員会が設立され、VOP戦略計画を発表した。その後2009年に戦略計画は「MANCHESTER: A GREAT PLACE TO GROW OLDER 2010-2020(マンチェスター:歳をとるのに素晴らしい場所 2010-2020年)」として拡充され、同年、高齢者が参加・体験できる文化事業が市内の複数の文化施設で開始された。

このような蓄積をもとにマンチェスター市は、2010年にWHOが立ち上げた「高齢者にやさしい都市・地域の世界的ネットワーク(Global Network for Age-Friendly Cities and Communities)」⁶に、イギリスから最初に加盟した。そして2014年に、エイジフレンドリー・マンチェスター(AFM)プログラムを発表、エイジフレンドリーシティ推進年とした。2016年に高齢者憲章を策定、2017年には「マンチェスター:歳をとるのに素晴らしい場所 2010-2020年」をアップデートした。市は優先度の高い政策テーマとして、以下の3つを挙げている⁷。

- ① 高齢者にとってより良い地域づくり(Age Friendly Neighbourhoods): 社会、文化、経済など、適切なサービス、住居、情報、機会にアクセスできる地域を創る。
- ② 高齢者に優しいサービスの開拓(Age-Friendly Service): 年齢に配慮したサービスを開発し、高齢者の雇用を維持、尊重する。
- ③ 年齢平等の推進(Age Equality): 高齢者の自信、満足感、自己肯定感、精神的健康にマイナスの影響を与えるような否定的な老いのイメージを変えていく。

このような高齢者にやさしいコミュニティづくりを目指した政策の中に、高齢者のための芸術文化活動も位置づけられており、その代表的な取り組みのひとつとして、2011年に始まった「文化チャンピオン(Culture Champion)」がある。これは、高齢者向けの大規模なボランティアの枠組みで、50歳以上であれば誰でも文化チャンピオンに参加できる。文化

チャンピオンは、美術館や劇場、ギャラリーやコンサートホールなど市内のあらゆる文化施設に、高齢者が気軽にアクセスし、芸術活動やイベントに参加することを目指している。現在 150 人を超える人が文化チャンピオンに登録し、ボランティアとして活動している。彼らは、身近な高齢者に地域文化活動やイベントの情報を提供したり、直接誘ったりするほか、文化関係の組織とともに高齢者のための活動を協働で企画・デザインする活動にも参加する⁸。現在、マンチェスター大学ウィットワース美術館の参加・教育部門(Learning and Engagement)に Age-Friendly Culture Coordinator という役職が置かれ、文化チャンピオンの窓口となっている。地域における行政、大学、芸術文化施設の連携が見て取れる。

このようにマンチェスター市における高齢者の芸術文化活動への参加やアクセスの促進は、高齢者の社会的排除や孤立を避けるための政策として位置づけられ推進されている。

2. ロイヤル・エクステンジ劇場概要

ロイヤル・エクステンジ劇場における高齢者に関する様々な事業も、AFM 政策を反映して展開されている。

ロイヤル・エクステンジ劇場(図1)は、マンチェスターの商業エリアである繁華街に位置する。18世紀初めに当時のビジネスセンターとして建設され、その後数度の建て替えや増築を経て「世界最大の部屋」と呼ばれる大空間を持ち、第2次大戦では被害を被ったものの、1968年まで綿花貿易の取引場として利用されてきた。1973年から5人の演劇集団が使うようになり、1976年に劇団を正式に創設、現在は登録チャリティとして、演劇公演などによる事業収入のほか、寄付や助成金を得て運営されている。巨大な空間の中に、宇宙船のようなメインステージが設置されている(図2)。7面形という変則的な形の円形劇場であり、プロセニウム形式の劇場と違って、幕も袖もなく上演には制約があるが、観客席と舞台の距離は最大9mと非常に近く、ユニークな作品上演ができる。座席数は750席である。劇場には他に、平戸間のスタジオ、カフェなどが併設されている。

劇場は、1年に14作品の演劇上演をするほか、戯曲賞を設けるなどプロフェッショナルな演劇活動を行っている。年間を通じて、500人を超えるスタッフを雇用し、そのうち150名程度が常勤スタッフ、残り350人は俳優や舞台技術者、クリエイティブ・チームなど短期契約の雇用である⁹。

また、子どもや若者を対象にした様々なコミュニ

ティプログラムを実施しており、2014年から始まった高齢者向けの活動もそのひとつである¹⁰。高齢者向けの参加型プログラムは、ステレオタイプな「古い」のイメージの変革を目的とし、観客としての高齢者ではなく、クリエイター、表現者として高齢者にチャレンジを促す内容である。プログラムにはエルダーズ・マンスリー、エルダーズ・エクステンジ・デイ、エルダーズ・カンパニー、エルダーズ・チャンピオンなど複数ある¹¹。エルダーズ・マンスリーは、毎月2回月曜日に高齢者向けのイベントを劇場で終日行うもので、認知症カフェ、演劇ワークショップ、戯曲や詩を書くワークショップ、演劇の作り方講座、朗読などで、有料のものもある。リーズ市の劇場リーズ・プレイハウスで1990年から先行して実施されている55歳以上の人のためのプログラム「ヘイデイズ(Heydays)」を大いに参考にしたという。



図1 エクステンジ・ストリートに面した劇場のメインエントランス



図2 大空間の中に、設けられたメインステージ外観

「高齢者の日」¹²に、イギリス全体で Age of Creativity Festival という様々な文化イベントが開催されているが、そのひとつとしてエルダース・エクステンジ・デイ行われている。マンチェスター市内の高齢者のグループによる演劇、サーカス、太極拳などの発表のほか、版画や美術などのワークショップもある。誰でも気軽に参加できること、劇場という拠点で交流ができることが重要だという。エルダース・チャンピオンは、ロイヤル・エクステンジ劇場版の「文化チャンピオン」である。

創造活動を行う専門家や文化チャンピオンら市民ボランティアの活動によって、劇場のように拠点となる文化施設が、市全体で進められているエイジフレンドリーな活動のプラットフォームとなることで、地域社会における劇場の公共的役割が強化できると考えられている。

3. エルダース・カンパニーの活動と特徴

ロイヤル・エクステンジ劇場のエルダース・カンパニーは、60歳以上の人を対象とした通年の演劇活動プログラムである。劇場が運営する「シニア演劇」の典型的な事例のひとつと言える。例年7月に参加者募集があり、定員は25名である。活動期間は9月から翌年7月までで、毎週定期的に授業が行われ、演劇実践に関する専門的な技術（例えば、スタニスラフスキー・システム、即興、フィジカルシアター¹³、人形劇、仮面劇、発声、スピーチなど多岐にわたる）を体験的に学び、劇場のメインプログラムの上演と合わせて、関連する劇作家や戯曲について学ぶ機会もある。年度途中から、演出家アンドリュー・バリー Andrew Barry 氏とともに上演に向けた創作が始まる。

2017年に“The Space Between Us”, 2018年に” Moments That Changed Our World” というタイトルの作品を上演、2018年は劇場のスタジオで6回、さらに劇場を出て2回のツアー公演を行なった。既存の戯曲は使わず、バリー氏が与える様々な質問や動きの指示に対して、参加者たちがそれぞれ答え、表現するワークショップを経て、バリー氏が舞台作品に組み立てていく。参考に、と参加者から提供された質問リスト (Talking Tasks) には、「社会の中で孤独を感じている人がいるとすれば、それはどんな人だろう?」「あなたは死という言葉にどう向き合うか」「あなたの肌について詳しく説明してください」など、20以上の項目が挙げられていた。

実際に舞台に出演するエルダースは、オーディションを経て25名の中から16名に絞られる。2018年の作品は、高齢者の個人史とマンチェスターの町の

歴史、さらに世界史の文脈とも結び付けられ、極めてローカルな話でありながら、グローバルな歴史も描き出す舞台となっていたと、劇場の担当スタッフは語る。

エルダース・カンパニーの舞台に立った参加者は、ある程度セリフを覚える必要はあるのだが、「私たち自身の言葉であり、私たち自身の物語なのだから、覚えることは難しくなかったし、それに必ずしも一言一句覚える必要もない」と、作品づくりのプロセスに非常に満足している様子だった。また、このような高齢者個人の経験を素材にした舞台について、「長く生きてきた私たちは皆、それぞれに記憶や物語を持っている。それが生き生きと甦り、舞台から真に迫るものとして観客に届く。そのことで、私たちも生き返ったような気がする」と語ってくれた。このような舞台作品を作るにあたっては、参加者たちが安心して語ることができる環境や雰囲気作りが非常に重要だったとバリー氏は強調する (Barry 2018) が、その努力を裏付けるように、参加者からは「アンディを信頼している」という声がロク々に聞かれた。



図3 劇場スタッフ（左端）とエルダース・カンパニーの参加者

エルダース・カンパニーのプログラムは、体験型の定期的な講座を通じて、演劇や劇場への関心や理解を深め、非常に熱心な劇場サポーターの育成につながっている。また作品作りのプロセスが、自らの人生を受け入れ、老いの受容やイメージの変化に大きく寄与していることがうかがえた¹⁴。高齢者自身の体験や思いを舞台化しているため、参加者は「私たち自身の作品だ」という強い誇りを持っている。リハーサルの過程で特に、プロの技術スタッフとアーティストに支えられることで、劇場への愛着も強まっていき、自分たち自身が劇場の一員なのだ、と語る参加者もいた。

劇場は、14歳から21歳を対象としたヤング・カン

パニーのプログラムも通年で実施しており、高齢者と若者が一緒に出演する作品も上演している。若い世代との共演は、大変刺激になったようで、参加した高齢者には非常に好評だった。1年間のプログラムが終わると、参加者はエルダーズ・カンパニーを卒業する。パリー氏は、メンバーが変化することで活動は活性化すると考え、参加者の固定を避けている。異なる世代のヤング・カンパニーとの交流・共同製作もそのひとつの方策であり、また、エルダーズの卒業生には劇場のメインプロダクションで配役が得られる機会もある。エルダーズ・カンパニーに参加した高齢者たちは、劇場を新たな居場所と感じており、プログラム終了後もエルダーズ・マンスリーでワークショップをリードしたり、エルダーズ・エクステンジで自分たちの舞台作品を発表したり、またエルダーズ・チャンピオンとして劇場の様々な情報発信やボランティア活動に率先して参加している。劇場は、認知症に優しい文化施設（Dementia Friendly Theatre）¹⁵を謳っており、エルダーズも研修を受けて、認知症フレンドリーを示すバッジをつけている。このように固定化せず継続的に新しい参加者を得ながら高齢者プログラムを展開し、その参加者が他の高齢者プログラムの運営に参加したり、劇場の他のプログラムをサポートする側として活躍できる場がある。高齢者が劇場のサービスの受け手から、サービスを提供する立場に成長できるような事業の展開が、ロイヤル・エクステンジ劇場のユニークなところだ。劇場に演劇作品を作る機能や専門的な人材があるからこそ、このような継続的で発展していく事業が可能になる。

劇場の高齢者プログラムの課題として、高齢者自身が指摘するのは、ヤング・カンパニーの参加者の4分の1が非白人であるのに対し、エルダーズはほとんどが白人で、マンチェスターの人種構成を反映してはいないということであった。劇場スタッフは、劇場が高齢者や若者のためのプログラムを実施するのは、劇場がコミュニティを包括的に表現し、地域の多様な人々に声を与えていくことだと説明していたが、より多様な人々の参加と関与を作り出していくことが求められている。

Ⅲ. 見えないものを顕在化させる演劇

1. 演劇の新しい表現を求めて—The Flames¹⁶

アマチュアの高齢者が舞台に立つ「シニア演劇」のもうひとつの事例として、フレイムス（The Flames）を取り上げる。フレイムスの舞台にはセリフの他に、

生演奏、映像、踊りなどが重要な要素として含まれるため、物語を伝える演劇というより、マルチジャンルのパフォーマンスと言う方が的確かもしれない。フレイムスは、「若い」の当事者がそのイメージの変化や受容に取り組むとともに、「演劇」という表現の可能性に挑戦しようとする意欲的な演劇プロジェクトである。

フレイムスは、トリッキー・ハット（Tricky Hat Production）というアーティスト・ユニットのイニシアチブによって、企画・創作・運営されている。グラスゴーを拠点とするトリッキー・ハットは、フリーランスの演出家フィオナ・ミラー Fiona Miller氏を核に、映像作家、音楽家、ダンサーらプロのアーティストが協働して¹⁷、高齢者や精神障害のある人々と舞台作品を作ってきた。ミラー氏は、大学で演劇を学んだ後、ダンディーやグラスゴーなどスコットランド各地の劇場で舞台演出に携わり、青少年演劇、大規模な野外市民劇の上演といった、様々な背景を持つ人々と演劇作品を作る経験をしてきた。ルーマニアなど海外での参加型演劇の上演などにも参画した経験から、地域社会にとって演劇がどのような価値を持ちうるのかを常に考えてきたと語る。

2. フレイムスの作り方

フレイムスの作品作りにかかる時間は、非常にコンパクトでスピーディだ。参加者にとって精神的にも時間的にも負担が少ない。しかし、のちに述べるように、そのプロセスは参加者に大きな満足感を与えている。フレイムスへの参加資格は、年齢50歳以上であること、参加したいという気持ちがあること、の2点である。

ミラー氏は、フレイムスの作品作りを「ゲリラ・セッション」と呼ぶ。5日間（週に1日、午前11時から4時）のセッション、6日目に上演会場でのリハーサル、7日目に昼と夜の2回上演を行う。昼公演の後にはお茶、夜公演の後にはワインを片手に、出演者と観客が交流できる時間を必ず設ける。このスケジュールであれば、スタートしてから6週間目に作品が上演できる。また、グラスゴーから離れた場所では1週間集中してセッションを行えば、週末には上演ができる。このやり方で、スコットランド各地（グラスゴー、ダブリン、ダンフリース、ギャロウエー、エジンバラなど）で、舞台を作り上演してきた。

メンバーは固定化せず、その都度その土地で参加者を募集するが、過去の参加者と初めての人が半々ぐらいの混合で進められることが多いという。男性の参加者もいるが、女性の参加者が過半数を占める。

現在までの参加者の年齢は 50 歳から 78 歳, 基本的には自分で移動できる人が対象だが, 中には障害のある人もおり, 幅が広いバックグラウンドの人が参加している。

セッションは氏が用意した質問をきっかけにして, 参加者の経験, 体験, 意見を引き出し, それを手がかりにしながらか表現を探っていく。戯曲や脚本が用意



図4 セッション後の意見交換の様子
(左から3番目がミラー氏)

されることはなく, このセッションを元に台本が執筆されるわけでもない。質問は例えば, 「あなたが最後に踊ったのはいつでしたか?」とか, 「人生におけるリスクとは何ですか?」というような, 誰もが自分の経験や思いを何かしら語ることでできるものである。氏が想定もしないような, 驚くべき答えが返ってくることもあるという。メディア・アーティストや音楽家も参加し, 参加者の発言を触発するような, あるいは, 触発されて作られた短い映像や生演奏とのセッションも試みながら作品作りは進んでいく。

最終的な舞台上演は, 何かひとつの物語を再現するナラティブな演劇ではなく, 参加者の経験や記憶のコラージュに, 音楽家の生演奏とメディア・アーティストの映像が, 有機的に関わり合いながら進んでいく。参加者一人一人が語るシーンに加え, 全員で動きを作り, 折りたたみ椅子などを使った抽象的な身体表現も展開する。参加者たちは, 何かの役を演じるわけではないので, 特に凝った衣装を纏うこともなく, そのまま舞台上上がる。大仰な舞台セットはなく, 素の舞台に, 照明, ライブミュージック, 映像, 10 数名のパフォーマンスが繰り返され, 30 分ほど(長い時には 50 分ほど)の上演が終わる。

スピーディに展開するフレームスの創作プロセスについてミラー氏は, 「これまでやってきたことが全て関係して出来上がってきたもの。素早くできるこ

とで, それなりに忙しい高齢者も負担感なく参加できる」と語る。また台本がないことについては, 「参加者は自分のことを語っている。何を話すのか自分でわかっている。それに, 毎回きっちりおなじセリフを話す必要はない。もし, 誰かが忘れても, 誰かが覚えている。だからこれは, アンサンブル・パフォーマンスなのだ。全員が常に舞台上にいて, みんなが互いに支えあっている。全てを覚える必要は誰にもない。それに, 音楽, 音, 映像など様々なきっかけがあるから, 公演を進めていくことができる。万一, 何か起こったとしても, それが舞台をイキイキさせてくれる」とそのメリットを説明する。

実際に観劇した印象では, 参加者たちは人前でパフォーマンスを行うという意識をはっきりと持ち, 構成された動きや, 言うべき内容を観客に伝わるように確信を持って振る舞っている。高い身体能力が必要とされるダンスシーンはないが, 見終わった後には, セリフ劇よりも身体的表現の印象が強く残る。また, プロの音楽家の生演奏とライブ映像が, 観客の舞台に対する集中力を高めており, 舞台作品としてのクオリティを支えることにつながっている。映像も音楽も, パフォーマンスの解釈や説明ではなく, 参加者たちと拮抗する表現となっているため, 現代的で, かつ即興的でライブ感を与えることに成功している。

3. フレームスを通じて得られたこと

フレームスは舞台作品の名前でもあり, そこに参加する人たちのことでもある。一度でもフレームスの舞台に立てば, 「フレームスだ」とミラー氏は言う。3 年ほど「ゲリラ・セッション」で作品を作ってきて, 現在は, テーマやアイデアをより掘り下げ, 稽古で積み上げ再演可能な作品を作り, イギリス, アイルランドでの巡回公演を計画している。これまでに参加してきた 100 人を超えるフレームス参加者から, より深く舞台作品に取り組みたい人を募り, 2018 年 11 月に, スコットランド西北部コブ・パークにあるアーティストインレジデンス施設で, 集中的なワークショップを行なった。20 人を超える応募があったそうだが, レジデンス施設の宿泊室や稽古場の規模から 16 人に絞り, 半分ずつ 1 週間のレジデンスを行ない, 作品の方向性を探った。

筆者が見学した時は, メディア・アーティストによる短い映像を見たのち, 参加者はふたり, もしくは 3 人のグループに分かれ, 映像から触発されたイメージを言葉と身体による短いシーンとして表現する, というものを繰り返していた(図5)。参加者からど

んなアイデアや、動きが出てくるのか、様々な球を投げているということだった。参加者は何度かフレームスに参加しているため、臆することなく次々とアイデアを形にしていた。

その日は9名が参加しており、フレームス参加の動機や参加した手ごたえと変化などについて話を聞いた。参加者は全員女性で年齢は55歳から76歳、経歴は様々であった。演劇については、全く経験のない人、プロの俳優として活動してきた人、青少年演劇のファシリテーター、アマチュア演劇の経験者がいた。これら演劇経験者にとって、脚本のない舞台作りは新鮮な経験のようであった。また、美術作家として現在も活動している人、大企業に勤めて海外で働いていたという人もいれば、教員だったという人もいる。年を重ねるにつれ、それまでのような活動ができなくなり、億劫になったこと（例えば、若い頃にようにセリフが覚えられないとか、体が動かないということで、自分に対して否定的になったなど）、家族の病気や死、仕事の変化などライフスタイルの変化で精神的にネガティブになり、何か新しいことに挑戦したいと考えたことが、動機として語られた。



図5 レジデンス施設でのワークショップの様子

質問に対して自分の考えや経験を述べ、それが元となって表現が作られていく、という創作プロセスについて、参加者からは以下のようなコメントが続いた。

「何も間違いはない、それは私自身のストーリーだからそれで良いのだ、ということが(演劇を作ることだけでなく人生の)大きな励みとなった」

「プロのアーティストが基盤を支えてくれることで、安心して表現できる」

「このようにクリエイティブな活動ができるのは、とても刺激的だ。3時間にわたって、泣き、怒り、途方にくれ、逃げ出したくなるような体験ができる。それ

は、ここが安全な場だから」

「私にも価値があり、大事にされ、受け入れられていると感じる」

「ごくごく普通の人生を歩んできた私からも、何かしら語るべきことを、フィオナが拾い上げてくれる。とてもすごい、驚くべき事柄はないが、重要で価値あるものとして、表現に組み入れられていくことに充実を感じる」

「舞台上で行われていることは、誰にでも起こりうることだし、観劇することで観客は自分の人生について別の考えや見え方を得ることができる。作品には普遍的な価値がある」

「終演後のティータイムの時には、私のところまで来て、自分の話をしたがる観客もいる。それは私だったかもしれない、と舞台を見て思うのだろう。これは、とても素晴らしいことだ」

このように、フレームスに参加することは、老いに向かい合うとともに、それまでの経験や人生を肯定する機会となっている。誰の言葉であれ、まずは受け止め、そこから表現を生み出そうとするミラー氏の演劇の作り方が、参加者の人生を肯定し、次へ踏み出す力となっている。全ての参加者が、フレームスが、いかに安全で安心して自己開示できる場であるかに言及したため、ミラー氏自身が驚いていたようだった。氏は、このようなセラピーとも思えるような(実際、クリエイティブな活動は、結果としてセラピーとして機能している、と語る参加者もいた)セッションが、最先端の演劇を作るためのひとつの方法だと考えていると話し、実際に観劇した舞台から非常に納得のいくものであった。

4. 新しい演劇の可能性を探る

ミラー氏は、様々な経歴の演劇を専門としない人たちと舞台を作ることを、自らの演劇的挑戦として活動してきた。訓練された俳優による舞台とは異なる、よりリアルな表現が可能になるのではないかと、そこに新しい演劇表現が生まれると考えてきたという。30年前に、既存の脚本を使った演劇をやめて、青少年や一般市民との舞台創造も数多く実践し、中高年との舞台創造もすでに20年の蓄積がある。現在クリエイティブ・スコットランドのポリシーに、「平等、社会的包摂、多様性」が掲げられていることもあり、フレームスの活動に社会的な追い風が吹いていると氏は感じている。

イギリスでは50歳から年齢差別が始まり、高齢者は社会の中で、「見えない存在」になっていく。一方老年期は、青少年期と同じく人生における大きな転

換期であり、改めて自分を見つめ直す機会となる。「それゆえに、非常に興味深い演劇作品が生まれる」と氏は考えている。フレームス参加者はそれぞれの人生経験をもとに表現を模索するのだから、そこに正解不正解はない。「正解を考えてしまうと表現できない。だから本当に自分自身を解放することが、このような舞台づくりには重要だ」とも言う。だからこそフレームスの舞台は、観客にとって高齢者のイメージを大きく変えることにつながっているのだろう。氏の活動は、演劇表現の更新とともに、社会における高齢者のイメージの変革、そして高齢者自身が肯定的に老いを受容する契機を生みだしている。

IV. 認知症の高齢者と介護者のための演劇

1. 演劇を医療・福祉領域に生かす

認知症が身近なものとなり、中高年が自ら認知症をテーマに演じる作品は日本でもしばしば上演されるが¹⁸、本項では認知症の高齢者とその介護者や家族を観客とする演劇作品「キュリオス・シューズ (Curious Shoes)」について取り上げる¹⁹。



図6 シャンバーガー氏と筆者

本プロジェクトを企画・制作しているマグダレーナ・シャンバーガー Magdalena Schamberger 氏(図6)は、演劇の中でも特にフィジカルシアターやクラウンを専門としつつ、医療や高齢者福祉の領域で演劇表現を活用する様々なプロジェクトに取り組んできた。例えば、ハート・アンド・マインド (Hearts & Minds) を 1997 年に共同創設し、訓練を受けたプロのクラウンやミュージシャン、パフォーマーを、病院や施設にいる子どものところへ派遣するプログラム (クラウンドクター Clowndoctors) や、認知症の人が入居するケアホームへ派遣するプログラム (エルダーフラワーズ Elderflowers) を展開してきた²⁰。音楽演奏やピエロのパフォーマンスが笑いを生み、コミュニケーションや交流を促進し、病気の子ども

やケアホームの高齢者には活気が戻り、またケアを担当する人々には休息を与えることができる。また、2016 年からは、アートフル・マインド (Artful Minds) というプロジェクトを立ち上げ、認知症に関する表現プログラムの開発や、様々な分野のアーティストのための認知症対応型の活動に関する教育プログラムの開発をしてきた。特に、ポール・ハムリン財団 (Paul Hamlyn Foundation) から大きな助成金を得たことが後押しとなって、劇場で認知症の高齢者とそのケアを担当する人が楽しめる舞台作品「キュリオス・シューズ」を製作し、2017 年3月に上演している。その後、2017 年秋にクリエイティブ・スコットランドの支援を得て、2ヶ月間スコットランドとイングランドの劇場、コミュニティセンター、ケアホームでのツアー公演を実施した。

2. 舞台「キュリオス・シューズ」ができるまで

4人のプロのパフォーマーが出演する(図7)本作品は、認知症の高齢者がストレスや不安を感じることなく、質の高い演劇作品を鑑賞できる機会を提供することを目的としている。そしてパフォーマンスを鑑賞することを通じて、認知症の高齢者がいつもとは違って他者から注目を浴び、声を聞いてもらえる機会を得られ、高齢者にクリエイティブな変化をもたらすことが期待されている。

作品のアイディアは、認知症の高齢者の様子を注意深く観察して生まれたという。認知症が進んだ人は、大きく前かがみの姿勢で座っているため、常に前方斜め下を見ている。彼らが人と出会う時、最初に見るのは顔ではなく足元の靴である。その靴との出会いで何か強い興味を喚起できれば、そこから面白い舞台ができる、と作品作りのきっかけとなり、作品タイトルにも反映されている。作品作りは、氏がそれまでの実践を通じて知り合った、認知症の人々とその家族、ケアスタッフらで構成されるフォーカスグループと一緒に進められた。

フォーカスグループでの議論を反映して、パフォーマーたちはそれぞれ特徴的な靴を履き、またそれぞれに個性的なキャラクターとストーリーを持つ。そして認知症の人にもわかりやすいよう、工夫された配色の小道具や衣装を身につける。フォーカスグループとの共同作業に3週間、稽古に4週間を費やし、エジンバラのフェスティバル・シアター²¹にある「スタジオ」で最初の上演が行われた。パフォーマーのうちふたりは、これまでにエルダーフラワーズとして、認知症高齢者が居住するケアホームでのパフォーマンス経験を積んでいる。

シャンバーガー氏たちは、ケアホームではなく劇場というクリエイティブな場所で、認知症の人のための舞台が作られたことが重要だと考えている。

3. 認知症の観客とコラボレートする舞台

認知症の人とその家族やケアする人のための公演ということで、観客を 20 名程度に限定している。パフォーマーが観客と細やかで丁寧なコミュニケーションを取れるよう、親密で安全な雰囲気を作ることが肝要だからである。



図7 上演の一コマ（冊子 Curious Shoes より）

劇場エントランスから、観客はパフォーマーたちに誘われて劇場にはいる。平土間の劇場空間に入ると、観客は手書きの名札をつけ、4つ用意されたテーブルの周りに座るように促される。上演の導入から観客たちは、パフォーマーたちと関わりあうのである。

作品にはシンプルだがストーリーがあり、理解できる人には物語を追うこともできるし、それが分からなくとも楽しめる。一緒に観劇する家族や介護者、まだ認知症が進んでいない高齢者にとっては、物語があったほうがより良い観劇体験になると考え工夫されている。作品全体を通じて、観客が反射的にアクションを起こし結果として参加してしまうような「計画されたハプニング」が細やかに設けられているという。

例えば旅行鞆を持ったパフォーマーがわざと転びそうになったり、一人でたくさんの旅行鞆を運ぶのに助けを求めると、観客が思わず立ち上がったたり手を差し伸べ、それがパフォーマンスの一部に組み込まれていく。もしそのまま観客が立ち上がったままでも、歩き続けても、それでも作品は成立する。観客

が座る4つのテーブルに、パフォーマーが一人ずつやってきて、手袋や手帳といった小道具や、簡単に音の出る楽器を触ったり交換する場面がある。最後には、観客も立ち上がって踊りだし、ちょっとしたパーティーのような雰囲気になるという。たとえほとんど歩けない人でも、パフォーマンスと音楽に刺激されて、立ち上がって踊ろうという意欲を見せるようだ。パフォーマンスが観客（認知症の高齢者）に動くきっかけを与え、その行動や変化が、ケアをする周りの人々に、高齢者のいつもとは違う様子や表情を気付かせるのである。

作品は、4人の登場人物が観客を未来へ導くシーンで終わる。観客が「私も一緒に行ってもいいですか？」と言葉にすることもあるという。観客たちは、パフォーマーに導かれて、赤い絨毯が敷かれたアクティングエリアに足を踏み出す。それは、架空ではあるが、未来へと観客が進み出す瞬間なのだと言っている。シャンバーガー氏たちは考えている。

上演時間は約1時間で、開場してパフォーマーが観客を会場に導き、テーブルに着席させたり、名札をつけたりするのに約15分、終演後観客がすぐに立ち去ろうとしないことも多く、テーブルでおしゃべりを続けることもあり、終演後にまた15分ほど会場に滞在することになる。普段は、周囲の人々とコミュニケーションすることが少ない認知症の高齢者が、何かしら会話を続けようとするのは、大きな変化なのだ、氏は作品の影響を語る。

4. 認知症の高齢者とケアする人のための演劇

エルダーフラワーズという、長年にわたる認知症高齢者との経験を踏まえ、当事者、家族やケアする人を交えたフォーカス・グループと協働して作り上げてきただけに、上演には大きな手応えを得られているようであった。認知症の高齢者だけではなく、そのパートナーや家族、ケアする人が共に観劇を体験することが重要と捉えられている。高齢者が思わず体を動かし、その表情に表れる変化を、一緒に体験する。幸せそうに見えたり、何かに集中している表情、また目の前の出来事に自ら進んで参加しようとする意欲など、普段とは異なる光が認知症の高齢者に当たる。そのことが、認知症高齢者と家族の関係を変えることになるきっかけになると考えているからだ。

上演後の観客の反応は非常に大きいとのこと、一緒に参加した家族やケアスタッフから、高齢者の変化についての驚きと発見を綴る長い手紙をもらうこともしばしばだという。また、参加した高齢者がケアホームに戻ってからも、公演について何度も話題

にすることがあったという。

認知症がすすんだ高齢者も、「今ここを生きている」のだから、過去の記憶や思い出に関わる音楽や物語ばかりをテーマにするのではなく、現在と未来に焦点を当てた作品とすることにシャンバーガー氏はこだわる。「未来へ向けた計画なんてもういらないのだ、と捉えられている高齢者にとって、未来へ足を踏み出しましょう、というこの作品の終わり方は、観客に大きな開放感を与えるはずです。私たちは、彼らのクリエイティビティを刺激することに集中して作品を作り上演しています。クリエイティビティ、リズム、ユーモアなどが、認知症の人々に働きかけ、長く続く印象を残すのだと思います」と作品の特徴と意義を語る。認知症の高齢者向けの芸術活動は舞台芸術の分野では、昔懐かしい音楽を聴いたり、ダンスをしたりということが、比較的良好に行われているが、過去を振り返ることばかりではなく、氏はアーティストとして、より大きな変化を生み出し、認知症の高齢者に対する見方そのものに影響を与えたいと考えている。

この作品は、氏の演劇プロデューサーやパフォーマーとしての専門性に加えて、長らく認知症の高齢者に働きかける活動をしてきた経験と実績、その中で培った人脈と知識が基盤となっている。多くの当事者が創造のプロセスに参加しているので、氏は「キュリオス・シューズ」は認知症の人々との共同制作だと言う。民間財団の5年間にわたる資金支援²²が作品創造を支え、それを引き継ぐようにクリエイティブ・スコットランドの助成が得られて、スコットランドでの巡回上演が実施できた。アーティストのプロジェクトを長期間にわたり継続支援する枠組みは、日本では稀だ。また氏は、高齢者施設や病院と連携したプロジェクトを進める中で、大学の看護学科²³と連携し、人材育成や新しい演劇上演の試みにも着手しているという。氏の活動全体が、アーティストの領域横断的な活動を支える資金や専門的知識の供与、異分野間連携の重要性を象徴している。

V. クリエイティブ・スコットランドの役割

1. クリエイティブ・スコットランドにおける高齢者の芸術活動支援²⁴

クリエイティブ・スコットランド(以降 CS)は、スコットランドにおけるアーツカウンシルで²⁵、スコットランドの芸術、映像・映画、クリエイティブ産業の発展を支援する公的機関である。その任務には、①財政支援(funding)、②育成支援(development)、③政策提言(advocacy)、④働きかけ(influence)がある

(学校法人東成学園 2018)。芸術組織の運営や事業に対する資金助成が①の財政支援にあたり、レギュラー・ファンディング(運営助成):組織に対する継続的な助成(3年間)、オープン・プロジェクト・ファンディング(事業助成):年間を通じて応募が可能な事業単位の助成、ターゲットッド・ファンディング(戦略的助成):特定の課題に対応するための助成という3つ助成プログラムがある。前述のフレームスも、オープン・プロジェクト・ファンディングで財政支援を得ている。しかしCSは、特に高齢者のための芸術活動に焦点をあてた財政支援や事業プログラムを持っているわけではない。

CSは公的機関として、その活動の根拠のひとつを2010年に施行された平等法(Equalty Act 2010)に則って責任ある活動を行う必要がある。平等法は、既存の9つの差別禁止法を整理・統合した法律で、以下9つの保護特性(protected characteristics)をあげる。①年齢、②障害、③性自認(性別再指定)、④婚姻及び民事パートナーシップ、⑤妊娠・出産、⑥人種、⑦宗教または信条、⑧性別、⑨性的指向である。CSも、公正でより平等な社会を推進するために次の3点に敬意を払い、助成先や関係の芸術団体と共にこれらの責任を果たして行く²⁶。

- ・違法な差別、嫌がらせ、被害者化、および法律で禁止されているその他の行為を排除する
- ・保護特性を持つ人々と持たない人々間の機会の平等を進める
- ・保護特性を持つ人々と持たない人々間の良い関係構築を育成する

その上で、CSの平等に関する4つの成果指標(2017年から2020年)を設けている。

- ① 今日のスコットランドの人口における増大する多様性を反映した助成
- ② 芸術や映画、創造産業に参加・関与する機会が、包括的でアクセス可能であること
- ③ スコットランドにおける芸術や映画、創造産業への雇用が、公正で、社会的に包括的で、ジェンダー、障害、人種、年齢に関する国内データを反映したものであること
- ④ CSのスタッフは、平等、多様性、包括に関する主流への真の取り組みを持つこと

CSでは以上の法律の定めに沿った平等、多様性、包括が、全ての業務の核となるものと認識されており、高齢者の芸術活動への参加や関与を促進するための事業や団体への支援の根拠もここにある。

スコットランドでも高齢者の人口における割合は増加しており、75歳以上人口は1997年からの20年で31%増加し、今後2026年までに27%、2041年には79%の増加が見込まれている。高齢者人口が増加する一方で、特に75歳以上の人々が文化活動に参加・関与する割合が大きく減っており、このデータもCSが高齢者に関する芸術活動支援の根拠となっている。

2. 働きかけて育てていく

個別プロジェクトの財政支援の他に、「働きかけて育てる」というCSの活動成果がよくわかる事例として、高齢者の芸術活動の分野ではルミネイト(Luminate)がある。2011年に、CS、エイジ・スコットランド、ベアリング財団²⁷との連携により創設された。エイジ・スコットランドは、スコットランドの高齢者を代表し、その権利と利益をサポートする有力な非営利団体である。またベアリング財団は、高齢者と芸術文化に焦点をあてて支援を行なっているロンドンの民間財団である。

ルミネイトは、高齢者の創造活動・表現活動の全国フェスティバル²⁸を開催するクリエイティブ・エイジングのための組織である。フェスティバルは、あらゆる人が年齢を重ねることの意味を探究する機会を提供することを目的に、2012年10月からスコットランド全域で毎年開催されてきた²⁹。1ヶ月間スコットランド各地で、展示、映像、オンラインイベント、パフォーマンス、ワークショップのような参加型の活動、トークイベントなど多彩な形式で、ダンス、演劇、音楽、美術、工芸、メディアと幅広いジャンルのイベントが多数行われる。高齢者自身が実演するものもあれば、認知症の人向けのコンサートや上演、世代を交えた創作活動の発表、高齢のプロのアーティストによる作品、高齢化社会の意味を問いかける活動も含まれる。

2019年のプログラムを見る³⁰と、これまでにケアホームや病院などで行われてきた芸術活動の成果発表もあれば、新たにアーティストが高齢者と取り組む進行中のプロジェクトも含まれている。フェスティバルを通じ、芸術活動が高齢者のウェルビーイングを高めるということを示すだけでなく、人生の後半に差し掛かった時、誰もが幸福で充実した生を送るためにはどうしたら良いのか、という誠実な問いが提示されているところに大きな特徴がある。

ルミネイトは現在非営利組織として独立し、CSのレギュラー・ファンディングを2度得ている(2015-18, 2018-21年)。また1年に1度の大掛かりなフェ

スティバルではなく、新しいアプローチとして高齢者による、高齢者のための創造的活動を年間を通じて実践するプログラムの開発と、高齢者介護と芸術分野両方での人材育成にシフトしつつある。このようにCSは、高齢者の芸術活動を促進する仲介的な非営利団体を、情報共有や支援のネットワークによって育てているのである。

3. 分野を横断する啓発活動の展開

またCSは、ケア・インスペクトレイト(The Care Inspectorate)³¹、ルミネイトと協働し、高齢者介護施設での表現活動に関する資料集「アーツ・イン・ケア(Arts In Care)」(図8)³²の開発を行ってきた。ケア・インスペクトレイトは、介護施設のサービスや環境を調査し、質の高い介護サービスを提供できるように改善をアドバイスする政府機関である。

ケア・インスペクトレイトが所掌する介護施設は高齢者だけでなく、保育園や青少年、障害者の福祉施設も含むが、このプロジェクトは高齢者のケアホームに焦点を当てたものである。ルミネイトとケア・インスペクトレイトのホームページによれば、「質の高いクリエイティブな活動実践をスコットランドの介護セクターに組みこむこと」を目的に、高齢者介護と芸術分野の両セクターにおける研修プログラムを開発し、スキルや能力を身につけた人材を増やすことが企図されている³³。芸術活動に関わることで、高齢者は過去の興味を再燃させ、あるいは特定の芸術分野に携わることでスキルを向上させ、何か新しい挑戦で創造的な思考が刺激される。芸術活動で社会的なつながりがもたらされ、地域社会との関係を深めることもできる。だからこそ高齢者は、どこに住んでいても、質の高い芸術や創造的な活動にアクセスできる必要がある、と高齢者介護における芸術活動の重要性が述べられている。

資料集は、「みんなで歌う」「クリエイティブ・ダンス」「詩を書く」「版画」「塩粘土」(小麦粉、塩、水だけで作った紙粘土のような造形材料)といった活動ごとに「レシピ」と呼ばれるリーフレットに分かれている。それぞれの活動の意義と効果、活動に必要な材料や道具、プログラムの進め方、高齢者との活動で配慮すべきことなどが記載されており、ケアスタッフがやってみようと思えばすぐにも取り組むことができるコンパクトな内容だ。例えば「詩を書く」というレシピには、目の前にあるものをリスト化していく、というシンプルな方法が示されており、それを読み上げたり録音したりすることでパフォーマンス的な活動へと展開できる。「版画」は厚紙とスタン

ブ台を使って作る簡単な方法で、必要な材料や道具の入手先（オンラインショップなど）も記載されている。また、アーティストと活動したい場合にはまずどうしたら良いか、費用、契約、活動の間の注意事項などについてのヒントも書かれている。いずれも、要点をコンパクトに押さえた工夫に満ちた内容だ。資料集には、実際のケアホームでの芸術活動に関する映像（DVD）も付属している。この資料集は、スコットランド内の高齢者のケアホームおよそ 900 ヶ所弱に送付され、オンラインでも利用できる。



図8 ケアホームに配布された資料集

CS で平等と多様性を担当するグレアム・リード氏は、ケアホームでの芸術活動の取り組みは、現場のスタッフの関心の有無によるため、いかに優れたものであっても資料集の配布がすぐに変化をもたらすとは考えていないようであった。とはいえ、このような手引書をスコットランド内の全てのケアホームに配布するところに、CS の「啓発」の姿勢が強く現れている。

さらに、ルミネイトと協働し、人材育成への取り組みも始めているという。ひとつは、アーティストが介護現場で自信を持ってアートプログラムに取り組めるような研修プログラムの実施で、ふたつ目はこれら研修を受けたアーティストをケアホームに派遣し、ケアスタッフと一緒にプログラムを実施するもので、ケアスタッフのスキルを磨き、自信を高めることに繋がると考えられている。アーティストのスキル開発を行いながら、同時にケアホームにおいて、スタッフの人材育成を行い、これを段階的に進めていく

ということだ³⁴。CS のアーティストに対する助成金も無尽蔵ではないので、高齢者の芸術活動、つまりクリエイティブ・エイジングを進めるには、ケアスタッフが自ら行うことのできる表現活動の拡張が必要というわけである。

ケアホームでの活動は、現実的にはケアスタッフのイニシアティブというよりも、やはり芸術団体が媒介するケースが多いという。リード氏によれば、2017 年春にケアホームスタッフとアーティストを招き会合を開いたところ、スコットランドの 25 地域から参加があった。ケアホームや高齢者の芸術活動の優れた実践例を紹介し、何が取り組みの障害となっているのか情報交換を行った。どのようにして一緒に活動するアーティストを見つければ良いのか、何から始めたらいいのかわからないという意見が多かったという。ルミネイトのように高齢者の芸術活動を明確にミッションに掲げる組織や、地域の劇場など拠点を持つ組織がアーティストとケアホームを結びつける役割を担っている。クリエイティブ・エイジングの充実には、これら文化施設など地域の拠点や、アーティストとのネットワークをもつ芸術団体を支援し、地域の情報交流と異ジャンルの連携を促進する CS のような役割が必要とされている。

VI. おわりに：高齢者の演劇活動の可能性

以上、劇場における「シニア劇団」の継続的な活動、アーティスト主導の中老年による演劇活動、認知症の高齢者とケアする人のための演劇作品、そして、広く芸術文化活動を支え促進する支援機関における事例を見てきた。

高齢者の芸術活動「クリエイティブ・エイジング」の促進と支援を助成の柱のひとつとしているベアリング財団代表デービッド・カトラー David Cutler 氏は、1960-70 年代のコミュニティ・アート活動を展開した芸術団体の中に、数は少なかったが、高齢者やケアホームに暮らすより弱い立場の高齢者を巻き込んだ活動があり、それが現在のクリエイティブ・エイジングにつながっていると振り返る (British Council 2018)。近年では、高齢者を対象としたプロの芸術活動やその総体が「クリエイティブ・エイジング」あるいは「アーツ・アンド・オールダー・ピープル」と呼ばれるようになり、特にこの 10 年で大きく発展してきたという。

イギリスにおける高齢者による演劇実践も、社会的に立場の弱い人たちと関わり合いながら、新しい表現を探るアーティストたちの営みの積み重ねの上

にある。ロイヤル・エクステンジ劇場には、子どもや若者を対象にした演劇プログラムというアウトリーチの蓄積がある。ミラー氏は、自身のアーティストとしての活動の軸を「見えないものを顕在化させる」「声なき人に声を与える」ことに置き、多様な人々と、プロのアーティストが共に舞台を作る活動を長年続けてきた。シャンパーガー氏も演劇や身体表現を医療や福祉の領域で活かす活動を 20 年以上実践している。演劇の専門家が、社会を構成する多様な人々と演劇活動を行い、特に、参加者自身の経験や意見を丁寧に汲み取りながら、ひとつの舞台に仕立てていくという方法と技術は、高等教育機関における演劇専門家の育成、応用演劇の思想とその方法の習得といったことが可能にしているものと推察される。また、このような舞台作品の作り方が、参加者の自信につながり、結果として上演作品が広く観客に共感を与えることにつながっているように思われた。

劇場やプロのアーティストの活動に関して、最終的な上演に補助するという日本型の財政支援を見直し、創造のプロセスに伴走するような、情報、知識、財政支援を行うような支援の体制・枠組みが肝要である。

以上、イギリスにおける複数の事例検討から、高齢者の演劇活動における専門家の明確な役割、ケアホームや行政など関係する諸団体との連携を促す媒介組織の存在、自治体における政策的位置づけの明確化といったことが、日本におけるクリエイティブ・エイジングの拡充には今後必要になると考えられる。

謝辞

スコットランドでのインタビュー・訪問調査については、現地での調整、スコットランドの劇場運営に関する知見等について、エジンバラ在住（当時）の演劇制作者齋藤啓氏より丁寧にアドバイスを頂戴しました。深く感謝いたします。

注

- 1 イギリスの芸術と健康・福祉を考える超党派の議員グループ (APPGAHW: All-Party Parliamentary Group on Arts, Health and Wellbeing) が 2017 年にまとめたレポートで、2015-17 年の間に実施した医療・社会福祉分野における芸術の実践と研究に関する調査から、政策・実践の改善に向けた提言を行なったもの。高齢者の芸術活動についても触れられている。
- 2 2018 年 3 月に、ブリティッシュ・カウンシルが東京と京都で開催したフォーラム「高齢社会における文化芸術の可能性：日本と英国の実践から」で紹介された。
- 3 Living in Manchester - our age-friendly city (2016 年発行) 参照。マンチェスター市のホームページからダウンロードできる。
https://www.manchester.gov.uk/downloads/download/6534/living_in_manchester_our_age-friendly_city (2020 年 6 月 24 日最終確認)
- 4 他に、70 年代の移民増加と 80 年代の経済不況に起因する人口構成の不均衡、イングランド国内で男性の平均寿命がワースト 2 位という事実、年金生活者の極度の貧困、不健康、障害、といった問題点が挙げられている。(マンチェスター市 Public Health 担当 Paul McGarry 'Building an age-friendly Manchester' OECD-APEC-WASEDA University Joint Workshop 2012 資料。
<https://www.oecd.org/internet/ieconomy/workshopo-anticipatingthespecialneedsofthe21stcenturysilvereconomyfromsmarttechnologiestoservicesinnovation.htm> 2020 年 6 月 24 日最終確認)
- 5 マンチェスター市の「高齢者にやさしい政策」(AFM) の取り組みについては、吉本 (2017) および市のホームページ: 'Our age-friendly work'
https://secure.manchester.gov.uk/info/200091/older-people/7116/our_age-friendly_work/4, WHO のホームページ 'Age-Friendly World: Global Network'
<https://extranet.who.int/agefriendlyworld/network/manchester/> を参照した (2020 年 6 月 24 日最終確認)。
- 6 WHO のホームページで検索機能を使って確認したところ、2020 年 6 月 24 日現在、41 カ国の 1,000 の都市や地域が、日本からは秋田市を始め 24 の自治体が名前を連ねている。
- 7 WHO のホームページにコンパクトにまとめられているものを参照した。Age Friendly World Manchester
<https://extranet.who.int/agefriendlyworld/network/manchester/> (2020 年 6 月 24 日最終確認)
- 8 文化チャンピオンとしての具体的な活動やエピソードは、吉本 (2017) に詳しい。また、マンチェスター市の 'Living in Manchester age -friendly city' にも、文化チャンピオンとして活動する高齢者が紹介されている。
- 9 劇場のホームページ
<https://www.royalexchange.co.uk/touring-visiting-companies> (2020 年 6 月 24 日最終確認)
- 10 以降の記述は、2018 年 11 月 16 日に劇場ホワイエで実施したインタビューと Barry (2018) による。インタビューには、The director of Creative Learning and

- Engagement である Inga Hirst 氏のほかエルダーズ・カンパニー参加経験者の 73 から 77 歳の男女 4 名 (Estelle, Gordon, Maureen, Mike) が参加して下さった。
- 11 Elders Monthly は、2020 年 6 月現在 Elders Monday と名称を改めている。
- 12 1991 年に国連加盟国が 10 月 1 日を「高齢者の日」 (International Older People's Day) と定めた。高齢者の権利や高齢者差別、高齢者虐待撤廃などの意識向上を目的としている。高齢者の日前後に、イギリス全国で Age of Creativity Festival が様々に開催される。
- 13 セリフや戯曲よりも、身体や物を使った動きを中心に物語やドラマを展開する舞台芸術で、道化 (クラウン) やパントマイム、仮面劇なども含まれる。ヨーロッパでは、physical theatre というひとつのジャンルとして認識されている。
- 14 老いのイメージの変化だけでなく、参加する前は腰を痛めていたが、稽古の途中から座ったり立ったりが楽にできるようになった、という身体の変化についてのエピソードもあった。
- 15 イギリスで始まった「認知症にやさしい地域 (Dementia Friendly Community: DFC)」という取り組みのいっかんで、自治体や地域など各コミュニティー内に存在する商店や交通機関といったさまざまな事業者や NPO が、認知症の人に必要なる「サービス」を考え、提供するもの。(朝日新聞デジタル「認知症フレンドリー」とは 英国で始まった無数の試み」2017 年 10 月 23 日) アルツハイマー協会 (Alzheimer's Society) の主導により、リーズやマンチェスターなど多数の自治体や地域が DFC に認定されており、劇場でも認知症の人が参加・利用できるような取り組みやスタッフの研修が行われている。
- 16 本項の記述は、2018 年 11 月 21 日、コヴ・パークのアーティストインレジデンス施設で滞在制作中の Fiona Miller 氏、The Flames 参加者 9 名 (Kate, Grace, Marian, Penny, Catherine, Betty, Lisa, Mack, Jess) との対話、2019 年 5 月 11 日グラスゴウの CCA (Centre for Contemporary Arts) で Luminare のプログラムのひとつとして行われた The Flames 上演の参与観察、2019 年 10 月 31 日鳥取大学アートマネジメント講座のいっかんで行われたミラー氏のレクチャー「高齢者による舞台芸術の可能性を探る」をもとにしている。
- 17 演劇を専門とするミラー氏、音楽家・作曲家 Mick Slaven 氏、メディア・アーティスト Kim Beverige 氏の三人が中心となり、プロジェクトによっては、振付家や、歌手、異なる手法の演劇人など様々なアーティストと協働している。2019 年からはグラスゴウ在住の日本人ダンサー小林彩氏がコア・メンバーに加わった。
- 18 日本の「シニア劇団」では身近なテーマやモチーフとしてしばしば取り上げられる。最近では演劇と老いを主題とする劇団 OiBokkeShi が、認知症の妻を介護する男性が自らを演じる「よみちにひはくれない」や、シニア劇団かんじゅく座の 2018 年公演「みのりの畑」には認知症の高齢者が登場する。
- 19 本項の記述は、2018 年 11 月 19 日にエジンバラにて行った Magdalena Schwamberger 氏へのインタビュー、および氏のホームページ：
<http://www.magdalenaschwamberger.com> (2020 年 6 月 24 日最終確認) による。
- 20 2017 年 12 月まで芸術監督を務めている。各プロジェクトについては、Hearts & Minds のホームページ参照 <https://www.heartsandminds.org.uk/> (2020 年 6 月 24 日最終確認)
- 21 エジンバラの中心市街地にある劇場で、現在は The Festival Theatre, King's Theatre and The Studio の 3 劇場を、登録チャリティ組織である Capital Theatre が運営している。夏の Edinburgh International Festival の公演会場としても使われる。
- 22 Paul Hamlyn Foundation のブレイクスルーグラントの支援により、2014 年から 2019 年初めまでで計 282,000 ポンドを得たという。認知症と舞台芸術に関する国内外でのリサーチと、「キュリオス・シューズ」の作品制作に当てられた。
- 23 シャンパーガー氏は、2016 年からエジンバラにある Queen Margaret University School of Health Science の名誉教授となっており、2018 年時点では、同大学看護学科の教授 Brendan McCormack と共同し、介護、演劇、デザイン、文化マネジメントなど異なる分野の学生たちと共同するプロジェクトの立ち上げに取り組んでいるということだった。
- 24 本項の記述は、2018 年 11 月 22 日エジンバラのクリエイティブ・スコットランドのオフィスにおいて行ったインタビュー (Equalities & Diversity Officer: Graham Reid 氏, Multi Art Form Manager: Lorna Duguid 氏), その際に提供されたレジメ資料 (Creative Ageing in Scotland) をもとにしている。
- 25 1994 年にアーツカウンシル・オブ・グレート・ブリテン (Arts Council of Great Britain 1945 年設立) が、イングランド、ウェールズ、スコットランドと 3 つのアーツカウンシルへ分割され、それぞれが独立した組織となり、その後スコティッシュ・スクリーン (Scottish Screen 1997 年に設立されたスコットランドの映像・

映画に関する公的機関)と統合され、クリエイティブ・スコットランドが発足した。

- 26 Creative Aging in Scotlandより。
- 27 1969年に設立された民間の助成団体であるベアリング財団は、差別や社会的弱者に関わる課題にアプローチし、成熟した市民社会を形成することを目的に活動している。3つの主要プログラム分野①英国における文化芸術と高齢者② イングランドとウェールズにおける法律と人権の適正な行使③ サハラ以南アフリカにおける性的少数者の権利向上を設けている。現在、年間200~300万ポンド(約3億5,500万~5億3,300万円)の資金提供を行うほか、他の団体と共同で助成プログラムも実施している(British Council 2018)。
- 28 フェスティバルの名前もThe Luminate Festivalで、2019年は'Celebrating creativity as we age'というサブテーマが設けられている。
- 29 2019年から5月に時期を移し、隔年開催となった。後述するように、ルミネイトがケアホームでの芸術活動を充実させることにシフトしているためである。
- 30 The Luminate Festival 2019
Brochure_compressed.pdf (2019年5月ダウンロード)
- 31 The Care Inspectorateは、スコットランド政府の機関で、2011年創設され(それまではSocial Care and Social Work Improvement Scotland)、ダンディーに本部がある。スコットランドにおける介護環境を調査し、改善を図ることに責任を持つ組織である。
- 32 Arts in Care Resource Pack
<https://hub.careinspectorate.com/how-we-support-improvement/care-inspectorate-programmes-and-publications/arts-in-care/> (2020年6月24日最終確認) オンラインでも読めるが、現物は大型の紙ファイルにまとめられている。
- 33 ケア・インスペクトレイトのホームページ
<https://www.careinspectorate.com/index.php/news/3313-arts-in-care> (2020年6月24日最終確認)、ルミネイトのホームページ
<https://www.luminatescotland.org/year-round-work/arts-care>(いずれも2020年6月24日最終確認)
- 34 インタビュー時(2018年11月)は研修の計画中ということだったが、ルミネイトのホームページ(注33)によればその後このプログラムは順調に実施が進んでいるようである。

朝日恵子(2015)「シニア演劇、その後」『上方芸能(特集 演劇のゆくえ：関西の課題)』(195), 19-23.

Barry, A. (2018) *Moments That Changed Our World : Evaluation and Learning Report*, Royal Exchange Theatre

British Council(2018)『高齢社会における文化芸術の可能性：日本と英国の実戦から』

学校法人東成学園(2018)『イングランド及びスコットランドにおける文化芸術活動に対する助成システム実態調査報告書』独立行政法人日本芸術文化振興会

学校法人東成学園(2018)『イングランド及びスコットランドにおける文化芸術活動に対する助成システム実態調査報告書 別冊』独立行政法人日本芸術文化振興会

Gordon-Nesbitt, R. (2019) *Older and wiser? : Creative ageing in the UK 2010-19*, The Baring Foundation

本田洋一(2020)「クリエイティブ・エイジング」に向けた芸術文化活動の意義：一ハンナ・アーレントの「パブリックな領域における活動」論を手がかりとして一『文化経済学』17(1), 35-45.

梶谷智(2015)『地域社会におけるシニア演劇の可能性—箕面市の劇団「すずしろ」を事例に一』静岡文化芸術大学修士論文

太下義之(2016)「Creative Agingのための文化政策」『季刊政策・経営研究』Vol. 4, 85-128

鈴木七美(2019)『エイジングフレンドリー・コミュニティ』新曜社

吉本光宏(2017)「高齢社会と向き合う英国マンチェスター—エイジフレンドリーな都市を目指して」『地域創造』Vol. 41 一般財団法人地域創造, 54-62

All-Party Parliamentary Group on Arts, Health and Wellbeing (2017) *Inquiry Report Creative Health : The Arts for Health and Wellbeing*

付記

本報告は、鳥取大学平成30年度学長裁量経費、2019年度文化庁大学における文化芸術活動推進事業採択「地域資源を顕在化させるアートマネジメント人材育成事業」における調査・活動成果の一部である。

本文中の写真は、図7を除き全て筆者撮影。

参考文献

Allen, P. (2018) *Arts in care homes: a rapid mapping of training provision*, The Baring Foundation